

可能無限へと耳を澄ませること

江村哲二さんがサントリー音楽財団から委嘱されて新作を創り、大阪で初演する。そのような大切な機会に参加しないかとお誘いいただいたことは、私にとって心から嬉しい驚きであった。

「クオリア」（質感）という問題意識に共感してくださってのことだという。もともと、私が意識の中で感じるクオリアの問題に目覚めたきっかけに、音楽の汲めども尽きぬ魅力に向き合った学生時代の経験があったから、江村さんのご厚意に、まるで旧知の友人に再会したような思いがした。

何か詩を書いてくださいませんかとお打診された時、英語で表現するしかないと思った。音楽

は、言葉の壁を超えて全世界に広がっていく可能性を持つ。だから、できるだけ多くの人に伝わる言葉を選びたかった。

もちろん、私は自分の国の言葉（日本語）を愛している。日本語でなければ表現できないニュアンスがあることも知っている。それでも、現代の世界における事実上の「リングワ・フランカ」（共通語）である英語を用いることで開かれる可能性に賭けたいと思った。江村さんも、賛同してくださった。

私の念頭にあったのは、イギリスの東洋学者アーサー・ウェイリーの英訳『源氏物語』の独特の魅力である。生きることの切なさ喜び。人に思いを寄せるといふ僥倖と苦しみ。名訳によって、日本の中で育まれてきた「もののあはれ」という生命哲学が、言語や文化の壁を超え

て広く人の心を動かす力を持つことが示されたのである。

人間の生命は、「今、ここ」の身体という制約を受けつつ、無限の可能性を夢見る。「可能無限への頌詩」に、ありったけの生きることについての思いを表した。

言葉にできることには限界がある。言葉が終わるところから、音楽が始まる。江村さんならば、きっと素晴らしい音楽をもって私の拙い言葉を補い、私たちが棲まうこの宇宙という場所の不可思議の一端を解き明かしてくれるだろうと信じた。

今、私たちは、その最初の音が空気をふるわせる瞬間を息を潜めて待っている。

かつて夢見たこと。夢見ることさえできなかったこと。出会えた人。通り過ぎていった者た

ち。永遠。有限。甘美さと沈痛と。

世界へ向けて放たれるその音の配列が沈黙へと変わる時、私たちは至上の芸術の本質が可能無限へと耳を澄ませることであったことを思い出さるう。音楽は、生命そのものなのだ。